

戦後80年

いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過します。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

第1回 戦時中の成田の様子

さとう ひろこ
佐藤 弘子さん 昭和15年生まれ

空襲警報がないことを祈る日々

当時は、東京や千葉などの大都市だけでなく、成田のまちが空襲されることもありました。東京や千葉などを襲った米軍の爆撃機B29が、銚子沖を抜けて帰っていく途中、成田上空で残った爆弾を落として行ったのです。

B29が近づくと、空襲警報のサイレンがけたたましく鳴りました。すると、私たちは急いで防空頭巾をかぶり、防空壕に逃げ込みました。防空壕とは、空襲の時に逃げ込むために地面を掘って作った穴のこと。穴の中は、「むしろ」というわらを編んで作った敷物を土の上に直接敷いただけで、とてもじめじめしていました。私たちは、防空頭巾をかぶったまま、B29が去って空襲警報が解除されるのをそこでじっと待つしかありませんでした。このため私は、毎朝「今日は空襲がありませんように」と祈っていたのです。

食べ物・着る物を我慢して

戦争中、一番困ったのは、食べ物。特に米がないことでした。周りに田んぼはあっても、米を作る大人の男性が、戦争に行ってしまったのです。残された女性と子どもで細々と米を作っていました。やっと出来上がっても、兵隊さんの食べ物にするため、国へ供出しなければなりませんでした。

代わりに、1週間に1回ぐらいの頻度で食べ物の配給がありました。配給とは、数に限りのある物を、みんなに行き渡るように割り当てて配る制度のこと。しかし、配給で



高等女学校生徒による勤労奉仕班

もらえるのは小麦粉やコーリャン(イネ科の穀物)、トウモロコシ・サツマイモの粉などで、ここでも米は手に入りませんでした。そこで私たちは、少ない食べ物を兄弟や家族、近所の人たちと分け合い、助け合うことで何とか暮らしていました。

次に困ったのは、洋服など、着る物がなかったことです。お店もなければ布地もなかったので、当時の母親たちは、家族のために自分の着物をほどこいて、もんぺや上着を作ってくれました。着替えがないので、2~3日同じ服を着るのは当たり前。私は4人姉妹の一番下だったので、いつも姉のお下がりを着ていました。お下がりの服は、あちこち破れたり裂けたりしていて、母がそれらを繕ってくれていました。継ぎはぎだらけの服を着ていても、恥ずかしいとも嫌だとも思わなかったのは、私だけでなく、周りの友達も同じように継ぎはぎだらけの服を着ていて、それが普通だったから。いつかお下がりではなく、新品の洋服を着てみたいと思っていましたが、わがままだと、ずっと我慢していました。

戦争が終わっても、すぐに世の中が平和になったわけではありません。食糧不足はむしろ、戦後の方がひどかったです。日本中の人たちが栄養失調状態だったので、伝染病が流行ると、みんなばたばたと死んでいきました。空腹のあまり、泥棒やすりをする人たちもいて、日本中の治安が悪くなってしまったのです。

これではだめだ、日本を良くしなくては、と多くの人が努力した結果、現在の平和な日本があるのです。戦争は、人の命はもちろん、全ての物を奪ってしまうので、絶対にはやってはいけません。

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和6年8月15日号 No.1513



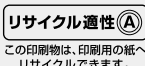
成田市のホームページ
<https://www.city.narita.chiba.jp>

*QRコードは(株)デンソーウェブの登録商標です

*本紙は8月1日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集後記

今月から15日号の裏表紙では戦争体験記を13回にわたって紹介します。私は幼い頃、曾祖母から戦時中に食べ物に困って蛇を焼いて食べた話を聞いたことがあります。戦争体験者の話を聞く機会は少なくなっています。この連載では、実際に成田で戦争を体験された方から寄せられた声も掲載していきますので、戦争によって、自分たちのまちや生活がどのようなになってしまうのかを考えるきっかけになればと思います。



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。